おばあちゃんのユタ日報

上坂冬子

文藝春秋

おばあちゃんの夕日報

上坂冬子

文藝春秋

著者略歴

1930（昭和5）年東京に生まれる。本名丹羽ヨシコ。OL生活13年を経て独立。在社中より上坂冬子のペンネームで執筆活動を続け「職場の群像」で一躍注目を浴びる。著書は「特赦—東京ローズの虚像と実像」「生体解剖—九州大学医学部事件」「巣鴨プリズン13号鉄扉」「慶州ナザレ園—忘れられた日本人妻たち」「遺された妻—横浜裁判BC級戦犯秘録」「男装の麗人・川島芳子伝」等多数。

おばあちゃんのユタ日報

1985年7月30日　第1刷

著　者　上坂冬子
発行者　西永達夫
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23
電話　東京03(265)1211(代)

定　価　1000円
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社

© Fuyuko Kamisaka 1985　Printed in Japan
万一落丁乱丁の場合はお取り替えいたします

おばあちゃんのユタ日報／目次

プロローグ……7
ユタ日報との出会い7　八十八歳の女社長11　長野県飯田市の出身15　発行部数は現在五百七十部17　年間購読料は七ドル19　モルモン教の総本山22　同業他紙からの転載記事24　記録された七十年の歩み28　母娘三人だけの新聞32

第一部　ユタ日報の誕生……35
知恵者で実務家36　父の破産でアメリカへ38　新世界新聞の塩湖通信員40　カリフォルニアの排日土地法42　日本へ活字を注文44　シーゴー・リリーとビーハイヴ46　ユタ州に二つの日系新聞48　しのぎをけずるライバル50　苦肉の料亭遊び52　アイダホ州へ拡張旅行54　創刊七年目の帰国56　ライバル紙買収と突然の死58

第二部　夫の遺志を継いだ信州女……61
同僚の身代りで結婚62　ミセスは料理がうまい65　油田試掘に乗り出す67　参会者五百人の盛大な葬儀69　亡夫の遺志を継ぐ決意71　寺沢国子社長就任の頃73　深まる日米の緊張関係75　日系二世の集団帰国77　時勢を反映する文芸欄79　苦境打開の集金旅行81

第三部　紙面にみる開戦前夜……85
傾ける月そのままに……86　祖国へ傾く思い89　無手勝流運転で近隣各州へ92　日米二重国籍の矛盾95　「二世の覚悟」を説く97　献

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

金をめぐる大論戦101　熱血二世の反論103　「スパイ法案」に警告106
紀元二千六百年奉祝号108　社説で存続危機の訴え110　目立つ入営壮行会の記事114　昭和十六年の明るいニュース116　「帰国御礼」の記事ふえる119　念願の新活字を購入123　日系市民協会への暴言126

第四部　日米決戦下の日本語新聞……131

太平洋戦争始まる132　発行停止処分を受ける134　再刊第一号のトップ記事137　敵性外国人の集団立退き140　日系人在住を容認したユタ州143　強制収容所向けの記事146　発刊以来の最高部数150　収容所からの文芸欄153　正面から日本軍部を批判156　収容所間の交流の場158

第五部　強制収容所の読者たち……161

昭和十八年の年頭所感162　ジャップ・イズ・ジャップ165　日系二世部隊の編成169　うなぎのぼりの部数172　不忠誠分子収容所の設立175
強制収容所の中の楽しみ178　言論の自由を認める国181　天皇の詔勅を翻訳掲載184

第六部　祖国日本の敗色……187

日系人徴兵に踏み切る188　人間の皮をかぶった豚192　さりげなく日系人の優位を示す195　日系人侮辱には反撃198　アメリカ経済も逼迫か？201　負け戦さの活字は拾いたくない204　米紙の翻訳以外は載せるな207　迅速に伝わる日本のニュース210　創刊満三十周年を迎える213

第七部　日本の敗戦と役割の終焉……217
太平洋沿岸立退き令の廃止218　大審院での勝訴221　祖国の起死回生を願う226　ルーズベルト大統領の死230　阿波丸事件の報道233　ポツダム宣言と原爆投下236　奮起せよ同胞、断じて落胆するなかれ238
あたしはアメリカに勝っている241
エピローグ……245
参考文献……254

口絵写真　著者
写真提供　寺沢国子

おばあちゃんのユタ日報

プロローグ

ユタ日報との出会い

その日新宿駅のホームに立った私は、これで当分の間中央本線に乗ることもないだろうと呟いた。川島芳子の取材のために、それまでに何度新宿―松本間を往復したことか。

川島芳子とは清朝粛親王の第十四王女で本名を愛新覚羅顕玗（あいしんかくらけんし）と言い、七歳の時日本人川島浪速の〝養女〟となって日本名を得た人である。「男装の麗人」として昭和初期に日本のマスコミの寵児となった一種の女傑で、軍服姿に身を固めたノーブルな美人の写真はすでに何度となく雑誌のグラビアなどで紹介されたから、五、六十代の人々なら脳裡の片隅に彼女の面影が残っているはずだ。

私は、川島芳子取材の総仕上げとして、芳子に関する写真を秘蔵しておられる方を訪ねるべく松本に向かったのである。芳子の養父で松本藩士出身の川島浪速が古稀の祝いの宴を華やかに繰

り広げたのは、松本市浅間温泉の老舗旅館小柳の湯であった。昭和十年一月九日付の信濃毎日新聞によれば、宴席となった大広間には、日の丸と満州国国旗と川島家の家紋を染め抜いた布を張り巡らし、それを背景に川島芳子が東京から引き連れて来た芸者衆がずらりと並んだと記されている。小柳の湯に当日の貴重な写真が保管してあると聞いて、早速借用を願い出た結果、快くご承諾いただけた。私は、矢も楯もたまらずに家を飛び出したのであった。だが残念なことにその日に限って先方のご主人は留守だという。早合点して日時の確約もせずに出向いたのが間違いだったと承知しながらも、私は軽い失望を感じていた。

そのときふと頭をよぎったのが信濃毎日新聞松本本社武藤清晏(きよはる)代表の存在である。武藤代表とは、それまで一面識もなかったが、見識の広い方だということはかねてから伝え聞いていた。幸い旧知のテレビ松本佐藤浩市社長が、武藤代表とは親交があるから、仲介の労をとるという。よい機会だからご挨拶したいと私は思った。前後の経緯からすれば事のついでにお訪ねする結果にはなったが、私は失望から一変して新たな期待に胸弾ませたのである。

初対面の、しかも大先輩の方を突然お訪ねするというのは無礼としか言いようがないし、今にして思えば何故あのように大胆な振舞いが出来たかと自分でも説明がつかないが、人生には時としてこんな瞬間があるものだ。そしてこんな瞬間がえてして事を思いがけない方向に運ぶきっかけとなる例が少なくない。

武藤代表は傍若無人な私の訪問を温厚な表情で迎えて下さった。だが世俗的な愛想とはおよそ無縁な方で、挨拶は一切省略していきなり私に、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あなたは村山有をご存じですか」

と質問された。有と書いて「たもつ」と読ませるその人の評論は戦後の雑誌で読んだことがある。

「ジャパンタイムズの社会部長をしておられた日系二世ですね」

間髪を入れず答えた私はたぶん、先生の質問に即答出来た優等生のような表情だったに違いない。

「村山有の母堂は信州のご出身なんですよ」

武藤代表は目を細めながら続けた。それがどうした、という思いで私は氏を見つめる。初対面で村山有の名を持ち出されたのも理由のないことだし、その母堂の出身地がどこであろうと、私とは関わりのないことであった。

そもそも私が村山有の評論を読んだのは、日系二世の東京ローズを調べていた頃のことである。太平洋戦争中に日本の参謀本部では、米軍側に厭戦気分を起こさせる文案を作成して英語の達者な女性に読ませ、短波放送で南の島の米兵に聴かせるという心理作戦を展開した。その女性アナウンサーの一人が東京ローズで、彼女は戦後にアメリカに帰ってから反逆者として懲役十年を申し渡され、内外の注目を集めた。村山有は当時この成行きを論評しながら徹底的に東京ローズを庇い、彼女を謀略放送に参加させた旧日本陸軍の将校たちを批難していたのを私は覚えている(「文藝春秋」昭和二十七年五月号)。

「威勢のいい文章を書く人でしたねえ」

適当に合いの手を入れたつもりだったが、武藤代表は私に答えず話を続けた。
「村山有の尽力で、戦後逸早く松本市はアメリカ・ユタ州のソルト・レーク市と姉妹提携を結びました。すでに二十五周年も過ぎ姉妹都市としては模範的なケースとなっています」
ソルト・レーク市という名には懐かしい響きがある。
東京オリンピックが開催された年、私はアメリカに旅していた。開会式の実況をニューヨークのホテルで見ている。もちろん私にとって初めてのアメリカ旅行であり、宇宙中継の放送を見るのも初めてのことであった。ニューヨークを起点に全米を巡回するその旅で、僅か一泊ではあったが、ソルト・レーク市にも立ち寄った。市の名所ともいうべき広大な露天掘りのビンガム銅山を見たあと、同じく有名なモルモン教の総本山を訪ねたところ、日系二世の信者たちから、
「あなたハウ・ロング(何時まで)滞在しますか?」
などと、妙な日本語で問いかけられたのが印象に残ったが、それ以上の感慨はなく、松本市とソルト・レーク市とが姉妹提携を結んでいると聞かされた私としてはここでも、それがどうした、という思いである。
「そのソルト・レーク市に八十八歳のおばあさんがいまして、彼女は信州からアメリカに嫁いで以来六十余年、ずっと日本語の新聞を発行しつづけているんですよ」
この一言を聞いて、気持がぐらりと揺れたのが自分でもはっきり分かった。
「その方、ご主人は?」
身を乗り出して尋ねると、

「戦前に亡くなりました。彼女は正真正銘の女社長ですよ」
武藤代表の口調はあくまでも淡々としている。
「新聞はいまも発行されているんでしょうか」
「ユタ日報といって、たぶん今日も配られているでしょう」
「間違いなく八十八歳のその人が手を下しているんですね」
「現役の社長兼植字工だそうです」
「過去の新聞は保存してあるかしら」
「日本の真珠湾攻撃のあと、しばらく発禁になったそうですが、創刊号から全部保管してあります」
矢継ぎ早の問いかけに対して簡潔な即答を得た私は、ここでひとおもいに言った。
「そのおばあちゃんを紹介して下さい。すぐアメリカに発ちたいのです」

八十八歳の女社長

「名前は寺沢国子といいます。いえ、とても八十八歳には見えません。実質六十代のおばあちゃんで、松本市の名誉市民ですよ。威勢のいい人で、私などいつも子供扱いされています」
と伝えてくれたのは、すでにソルト・レーク市訪問七回に及ぶという、松本市商工会議所の本郷文男専務理事である。本郷専務理事と引き合わせて下さったのは万事に無駄のない武藤代表の計らいであった。

「毎年夏休みに、松本市からソルト・レーク市に学生たちがホームステイに行っていますし、現在ソルト・レーク市側の事務局長を務めるスプリング・マイヤー夫妻は、私が仲人をして松本市の岡宮神社で神前結婚をしました。すでに二児の親になっていますが、子供たちはユウスケとミチコで私が命名したんですよ」

一般に姉妹都市といえば市長同士が握手を交わし、型通りの見学視察を交換させるに止まる場合が少なくない。だが松本とソルト・レークとの間に、こうして異例の肉親的姉妹都市関係が保たれているとするならば、私は義姉妹として割り込ませていただこう。

早速松本―ソルト・レークの旅に手慣れているという松本市内の旅行代理店に計画を相談し、成田発十八時の日航〇〇二便に乗れば、日付変更線のお陰でその日のうちにソルト・レーク入りが可能だと分かったちょうどその頃、本郷専務理事から朗報が入った。

「先方はいつでもどうぞとのことです。飛行場には長女を迎えに出すと言っていました」

こんな恵まれた取材旅行が過去にあったろうかと、私はむしろ事の成行きに呆然とする思いである。

かつてB29爆撃機の米兵を「生体解剖」した九州大学医学部事件を手がけたとき、当然のことながら私は医師団のボイコットを受け、取材現場からつまみ出された。また、巣鴨プリズンで絞首刑になった戦犯の未亡人を全国各地に訪ね歩いたときも、当初妻たちは固く口を閉ざして私を見つめるのみであった。韓国・慶州で日本の老婆を保護している老人ホームを見つけた私が、一種の美談としてこれを紹介しようと心を決めたときにさえ、韓国人のホーム長はしばらく私に対

する警戒を解こうとしなかった。

人々の心を和らげ、その重い口を開かせるまでに、私はいつも精力の大半を使い果たしたものである。それがなんということだ、いま横付けされた黒塗りの車のドアまで開いてもらって、乗りさえすればいい立場にある。義姉妹になりすまして強引に姉妹都市関係に割り込むつもりだった私は、むしろ逆にたじろぐ思いさえ感じていたのであった。

本郷専務理事はここでさらに付け加えたのである。

「先方の仕事の邪魔にならぬよう、インタビューは一日に二時間程度がいいでしょう。あ、それからまだ他のマスコミから取材申込みはないそうですよ」

宿はユタ日報社から一番足場の良いユタホテルをすでに予約済みという。商工会議所流の見事な実務ペースであった。昭和五十九年十月のことである。

サンフランシスコまではかつて東京ローズの取材で何度も往復したから勝手は分かっている。サンフランシスコから国内線に乗り換えて二時間半程でソルト・レークの空港に着いた。ここまで来ると乗客の中の日本人は私一人で、出迎えの長女和子は迷うことなくこちらに向かって手を振った。度の強い眼鏡の奥の柔らかいまなざし、鼻も口も耳も、すべて大づくりなその表情は、男なら差し詰め豪放磊落と表現されるに違いない。初対面で私は一切の警戒心を振り払った。小柄で、小太りで、見るからに働き手といった彼女の体格には、そこはかとない愛嬌があり、シャツとズボンというその服装から何故か私は、独身に違いないと確信した。

「そう。五十八歳。あなたよりちと年上だけど、お互い独身で、立場は似てるね」

と彼女が独特のイントネーションの日本語で答えたところから察するに、私に関する資料も届いているのだろう。

「ユタ日報はここからほんの十五分なの。昔は毎日のようにお客さんがあって、送り迎えに忙しかったから、飛行場に近くないと困ったわけよ」

昔は、というところが殊更強く響く。今は一体どんな新聞社なのか。

北五十二番、西千番通りの四つ角から二軒目に、白い四角な建物がある。前庭に植込みのある平屋造りのオフィスは、両側の住宅に挟まれて全く違和感がない。時は昭和五十九年十月、前庭に李が実っている。表通りに面した壁に「The UTTHA NIPPO」とあるが、控え目なその表示はうっかりすると木の間隠れに見落としてしまいそうだ。脇へ回ると気配を感じてか、内側からドアが開いた。

「アラ。いらっしゃい」

声の主を必然的に私は見下ろす形となる。背丈が私の肩ほどしかないのだ。真っ白な髪をひっつめにして、左手に原稿、右手に活字を持ったまま立っているその人が、目指すユタ日報社長寺沢国子であることは一目瞭然であった。額の上に押し上げた老眼鏡は仕事に際してずり下ろすのだろうか。紺のセーターに茶のズボンは、一見して仕事のほかはすべてに執着を捨てた人生を象徴している。小さな足を包んだ黒い布靴は、いつか北京で見たのと同一ではないか。

「そうなの。ソルト・レークには世界各国の人が住んでいるのよ。中国、メキシコ、ベトナム、それに近頃はアラブの人も増えたわねえ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com